

『花修』の世阿弥能楽論上の位置付け

——『問答』との関係を中心に——

重田 みち

世阿弥伝書『花伝』第六に当たる『花修』は、「能の本を書く事、この道の命なり」という言葉で始まり、能の作詞について述べた部分も多いために、一応は作能論書と扱われることが多かった。しかし本書を作能論書として見た場合に決して体系的と言えないことは、すでに竹本幹夫氏「世阿弥能作論の形成」(『中世評論集』所収、角川書店、昭和51年発行)が、「観点を変えれば演者論とも演技論ともとれるのが「花修」の最大の特色であり、『花修』全体を作能論書と見なすことを疑問視し、世阿弥が「作者とか演技者とかを超越した、一座の棟梁という立場に立って『花修』を述作したのである」と結論付けておられるとおりである。『花修』という書名が決して作能論書を思わせるものではないことからも、筆者も『花修』の主眼は作能とは別にあると考えるが、その点に関して本稿では、同書と『花伝』第三に当たる『問答』との関わりにあらためて注目したい。

まず、『花修』第一条の冒頭「能の本を書く

事、この道の命なり」は、勝負の立合について述べた『問答』第三条に、自作の能を多く持つことの重要性を説く点と対応し、特に両者が作能について「この道の命なり」と同じ表現を用いることには注意される。また『花修』第一条には、「大かたの風体、序破急の段に見えたり」ともあり、明らかに「序破急の段」に相当する『問答』第二条を承ける形で、一つの催しのどこでどのような曲を演じるべきかを重視しつつ、作詞についてさらに具体的に説く。曲趣による「時分・入れ場」について述べるのも『問答』第二条を承けているからである。『問答』のこれらの条々に、ともに『花修』をふまえた増補と思われる部分がある(注)ことから、両書の関係の深さが窺える。

また、同条の最終段「又、一切の事に、相応なくは成就あるべからず。(中略)よき能を上手のせん事、なにとて出で来ぬやらんと工夫するに、もし、時分の陰陽の和せぬ所か」云々という部分は、『問答』第一条の、増補説

が唱えられている最終段「抑、一切は、陰陽の和する所の堺を、成就とは知るべし」云々と用語も重なり、内容も関連している。

次に、『花修』第二条に説かれる「音曲」と「風情」(所作)との関係は、『問答』第七条の「文字に当たる風情」と基本を同じくし、演技する観点からのみ説かれる『問答』に対し、『花修』ではそのような演技につながる作詞の方法についても説く。ここにおいても『花修』『問答』には「音曲・はたらき一心になる」という同一表現があり、『問答』のこの部分が『花修』をふまえた増補と思われる部分であることが注意されよう。

その次に、『花修』第三条の「強き・幽玄」の論は、『問答』第六条に説かれる「位の差別」論と関係が深いと思われる。同条の「生得幽玄なる所あり。これ、位也。しかれども、さらに幽玄にはなき為手の、たけのあるもあり。これは幽玄ならぬたけなり」という部分の末文を、世阿弥が「幽玄なるたけ」と「幽玄ならぬたけ」を想定していたとする解釈もあるが、筆者はこの「幽玄ならぬたけなり」に、「幽玄」という位とは別の、たけという位なのである」という解釈を採用し、同条が「幽玄」と「たけ」という二種の位について説いたものであると見たい。「たけ」は、いかめしい気高さまたは強さの感じられる体を表す言葉である。これは、『花修』第三条が「物のふ・荒夷・あるいは鬼・神、草木にも松・杉」の類を表

すとする「強き」に通じる。『問答』では、「幽玄」「たけ」とも肯定的な位として捉えられているようであるが、『花修』では「幽玄」「強き」という肯定的な芸を、「弱き」「荒き」という否定的な芸と比較し、『問答』よりもさらに詳しく説くのである。なお、『問答』同条の末尾に「よくよく公案して思ふに、幽玄の位は生得の物か。たけたる位は功入りたる所か」とあるが、このように「たけたる位」の定義付けに世阿弥が後に疑義を生じたために、『花修』では「たけ」が「強き」という表現に取って代わっているのではあるまいか。

また、同じく『花修』第三条をふまえた増補部分として、『問答』第七条の「又、強き・弱き事、多く、人、紛らかす物也」云々と「強き・幽玄」を説いた部分が指摘されている。これも、『花修』と『問答』との結びつきの強さを物語るものであろう。

最後に、『花修』第四条における、為手の位や場所による「相応」論は、「いかなる座敷にも相応するほどの上手」を理想的な為手と見なしており、『問答』第一条の「当日に臨んで、まづ座敷を見て、吉凶をかねて知る事」の論と関連が深い。『問答』第一条の内容を「相応」という語を新たに用い、一般化して説き直し、それに「上手ほどは能を知らぬ為手」と「能よりは能を知る」為手との論を加えたのが、『花修』第四条であると言えよう。なお、同条の「能を知る」は、従来「能の本質を知る」な

どの意味に解されているが、「自身の芸力や自分に向いた芸を知る」という意味に解すべきと考える。

以上のように、『花修』はいずれの条も『問答』の内容をふまえており、また『問答』には『花修』の説をふまえた増補が多い。右に取り上げなかった『問答』条々のうち、第四・八・九条はそれぞれ、「時分の花」「まことの花」、「しほれたる」花、「能に花を知る事」を説いたものである。いずれも「花」の語に関連した条々であり、『年来稽古』や『花伝』第七『別紙』に関わっていることが、『花修』に取り上げられなかったことと関係しているのではあるまいか。

また、「能と工夫」を極めることの重要性を説いた『問答』第五条は、『花修』と用語面において特に密接に関連しているようには見えないものの、『花修』全体の内容を顧みるに、そもそも主眼は、「能と工夫」のうちの「工夫」について説くことであつたのではなからうか。『花修』の末尾には「此条々、心ざしの芸人より外は、一見をも許すべからず」という一文がある。これは本書が、基礎的な芸を一応身につけた役者を対象に、応用的な事柄を説いたものであることを意味していよう。それはすなわち、作詞論をも含んだ実践的な「工夫」を説いた書であるとも言ひ換えられる。このように、『花修』が『問答』の「花」を中心に説いた条々以外のいずれとも密接に

関連している点には、もっと注意が払われてよいのではあるまいか。

ところで『花修』が、現在観世宗家に伝わる系統の本が知られるのみであり、他の多くの世阿弥伝書を伝える吉田本（元雅の子孫の系統の伝書群）や金春本（金春大夫家に伝わった伝書群）に含まれていないのはなぜであろうか。これに関して注意されるのは、一つには、金春禅竹に相伝された『拾玉得花』に、「当道も、花伝年来稽古より、物覚ものまね・問答・別紙、至花道・花鏡、かくのごときの条々を習道して、奥蔵を極め、達人になりて、何とも心のまゝなるは、安き位なるべし」とあり、『花修』の名が挙がってこないことである。もう一つには、先述したように、『問答』に『花修』をふまえた増補部分が何箇所も見られることである。これらを鑑みると、世阿弥は後年になって、『花修』独自の内容を『問答』に増補し、『花修』を不用の書としてしまった可能性があるのである。棟梁の心得についての書であるならば、元雅はともかく、禅竹に相伝されていても不思議ではない。世阿弥の主張や論旨が不徹底な部分のしばしば見られる本書は、そのような想像を抱かせる面を持っており、思うられる。

（注）本稿に述べた『問答』増補部分については、表章氏「花伝から『風姿花伝』への本文改訂」（大阪大学『語文』38）および竹本氏「風体形成試論」（『能研究と評論』13）を参照。